

# 韓国における落葉果樹の生産・流通事情

中央果実基金・海外果樹農業情報No.70

## 1 りんご

### (1) 主要産地

りんごの産地は、慶尚北道の北部地域に最も多く、このほか忠清北道、忠清南道及び慶尚南道のそれぞれ一部地域にあります。すなわち、韓国中央部に多く、2000年度における慶尚北道の生産量は、全国の63%を占めています。

### (2) 栽培面積と生産量の推移

2000年度におけるりんごの栽培面積は2万9千haであり、85年度の77%の水準です。これは、92年度をピークに、栽培面積が急速に減少してきた結果です。この面積の減少は、りんごがもはや国際競争力を持たないものと判断されたためであって、後述するなしやぶどうの面積増加につながりました。

一方生産量は、90年代初めに災害などのため低迷しましたが、95年に71万6千tとなり、ピークを記録しました。その後は栽培面積の減少とともに減少し、近年は50万

tを僅かに下回る程度で落ち着いています(表1)。単収は、若令樹が多かった90年代前半は低かったが、その後上昇し、2000年

韓国行政図

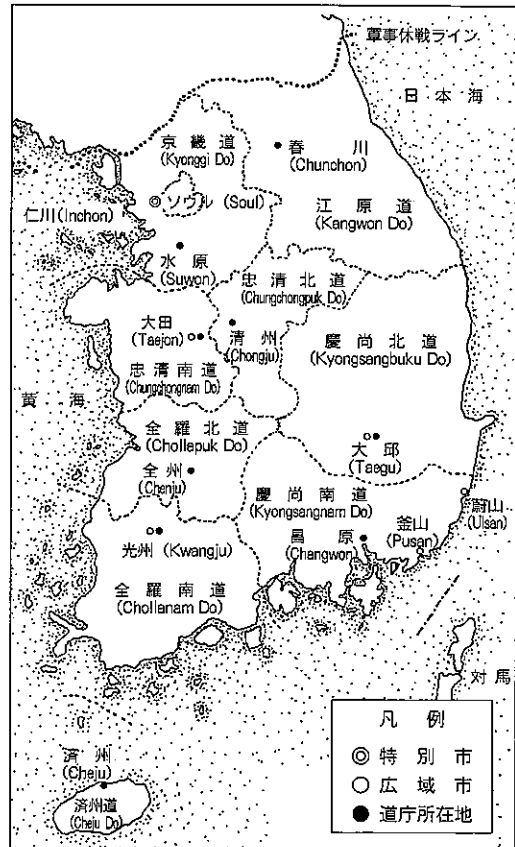
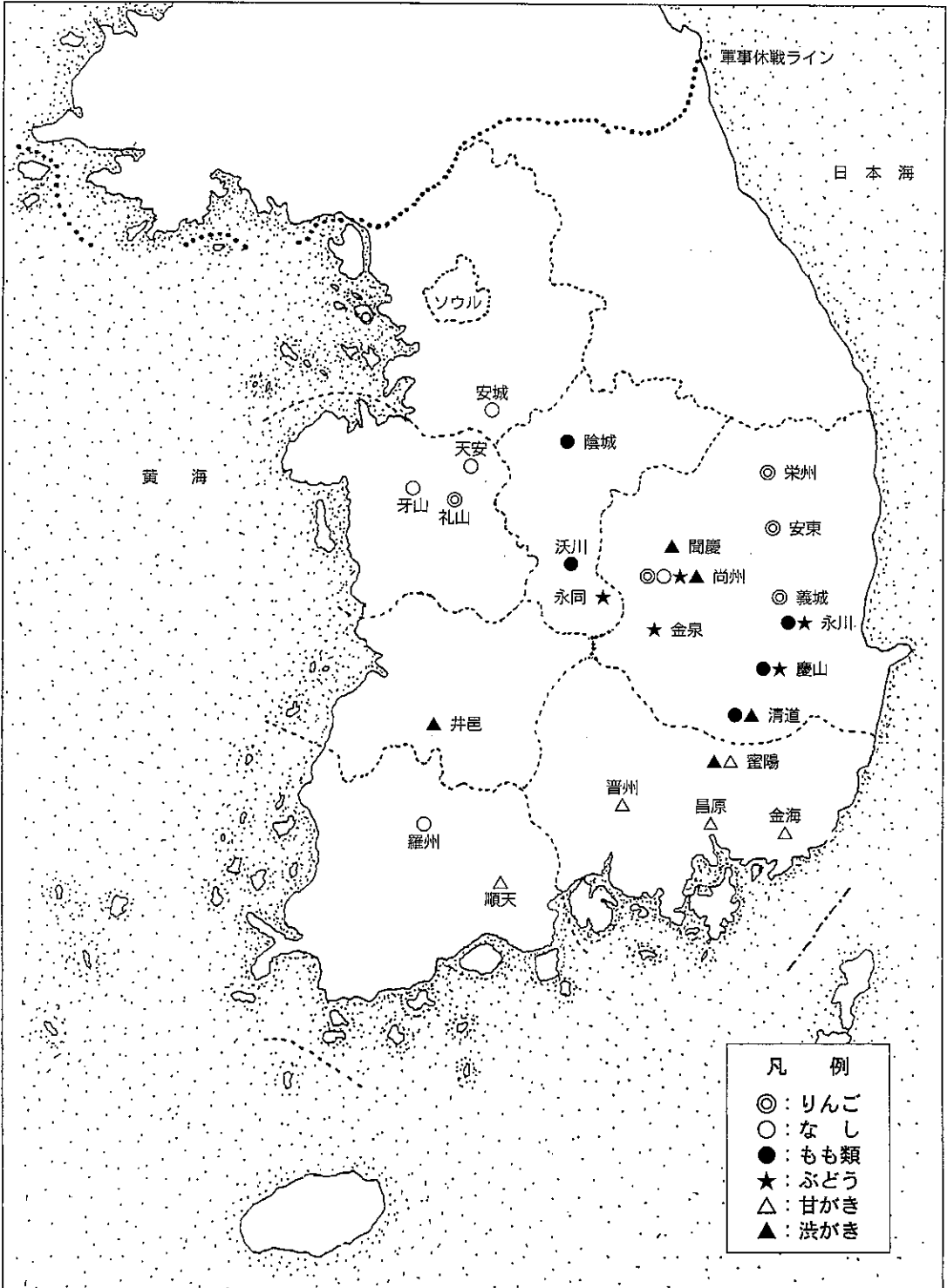


表1 りんご栽培面積及び生産量の推移

(単位: ha, t)

	1985年度	1990	1992	1994	1996	1998	2000
栽培面積	37,698	48,833	52,985	52,098	43,857	34,692	29,063
生産量	532,571	628,947	694,766	616,505	651,406	459,010	488,960

韓国における主要な果樹産地



には10a当たり1.7tになっています。りんごの単収は、急増している低樹高密植栽培の拡大とともに、更に上昇する見通しにあります。

### (3) 品種別栽培状況

1987年度からその後10年間の動きを見ると、全般的には、早生種の急増、もともと圧倒的に多かった晩生種の更なる増加があり、反面、中生種は急速に縮小しました。全体の栽培面積シェアでは、1987年度に早生種は0.8%であったが、1997年度には12.9%までシェアを伸ばしました。他方、中生種は、同25.9%から7.4%まで低下しました。このシェアの変化の主要因は、1987年度には中生種に分類されていたかなりのシェアを占めていた「つがる」が早生種に分類し直されたことによるものです。なお、晩生種の1997年度におけるシェアは約80%であり、晩生種が圧倒的なシェアを占める栽培体系には変化がありません。

品種別には、中生種では種類が多く品種の移り変わりも激しいが、1992年度以降、早生種では「つがる」が、晩生種では「ふ

じ」が、それぞれほとんどを占めており、早生種と晩生種では特定の品種に集中していると言えます（表2）。

### (4) 輸出状況

90年代の始めにはりんごが戦略的な輸出品目として輸出志向が高まり、輸出が増大しました。しかし、その後、国際的な競争力を失ったこともあって輸出は急速に減少してきました。特に、台湾、タイ、インドネシア市場向けが減少しました。

2001年における輸出量は3,733tで、輸出額は約3百万ドルでした。輸出仕向け国別に見ると、日本が一番多くて1,644t、この他台湾、インドネシア、シンガポールの順となっています。

## 2 なし

### (1) 主要産地

なしの主要産地は、全羅南道、慶尚北道、京畿道、忠清南道等の地域であり、かなり全国的に広がっていて、りんごのように集中していません。10大産地の栽培面積を合わせても全国の48%に過ぎません。1999年

表2 1997年度におけるりんご主要品種の栽培面積

(単位：ha)

早生種計	5,489 (12.2%)	中生種計	3,338 (7.4%)	晩生種計	36,086 (80.3%)
つがる	5,434	紅 月	850	ふ じ	35,500
モーリーズデリシャス	71	紅 露	577	北 斗	196
		陽 光	267	華 紅	93
		千 秋	122	国 光	49
		ゴールデンデリシャス	59	陸 奥	48

(注) ( ) 内は栽培面積全体に占める比率

度において最大の産地である全羅南道（韓国の南端）の羅州地区の栽培面積が全国に占める割合も、わずか8.4%です。

(2) 栽培面積と生産量の推移

りんごとは対照的に、90年代に入ってから栽培面積は着実な増加を続け、2000年には2万6千haに達し、1985年に比べて190%増となっています。これは主に、りんご園から転換されてきたためです。

一方生産量は、90年代初めから中頃までは、若令樹が多かったため停滞しましたが、それ以降は急速な伸びを示し、2000年度には30万tを超えています（表3）。

しかしながら、単収は80年代後期が最高（2.3t/10a）で、その後若令樹が増えたため逆に低下し、2000年度になって回復してきたが1.2t/10aにとどまっています。

(3) 品種別栽培面積

なしは年々中生種を中心とする栽培パターンが強くなり、特に早生種のシェアは微々たるものになっています。又、晩生種は、面積が余り変化しておらず、栽培面積全体が増加したことから、シェアが低下しています。各品種の中では、新高の栽培面積が特に急速に増加し、圧倒的なシェア（1997年度で全体の栽培面積の73%）を占めています。反面、長十郎や晩三吉は減少し、まだ面積は少ないが増えている品種は、園黄、幸水、黄金、華山、豊水、甘川、秋黄などです。

なお、新品種は主として中生種及び晩生種に現れています（表4）。

(4) 輸出状況

近年、生産量が急速に増加し、国内の価格は低下しましたが、国際市場においては

表3 なし栽培面積及び生産量の推移

(単位：ha, t)

	1985年度	1990	1992	1994	1996	1998	2000
栽培面積	9,022	9,058	10,339	12,649	18,248	24,612	26,206
生産量	128,079	159,335	173,511	163,729	219,322	259,770	324,166

表4 1997年度におけるなし主要品種の栽培面積

(単位：ha)

早生種計	468 (2.1%)	中生種計	19,572 (87.8%)	晩生種計	2,260 (10.1%)
園黄	178	新高	16,332	晩三吉	809
幸水	148	長十郎	1,848	甘川	573
新水	53	黄金	541	秋黄	481
長寿	31	華山	380	今村秋	266
新世紀	15	豊水	255	新紅	52

(注) ( ) 内は栽培面積全体に占める比率

価格競争力が生じてきたことから、輸出量、輸出額とも95年以降急増しています。2001年に輸出額は2千万ドル近くに達しました。この年の輸出量は11,455tで、30か国近くに輸出されています。一番多いのは米国向けで6,300t、次いで日本(1,000t)、カナダ、インドネシア、香港、シンガポールの順です。

2001年の平均輸出単価は、1,707米ドル/tでした。

### 3 もも類

#### (1) 主要産地

もも類(ネクタリンを含む)の産地は、韓国中部の慶尚北道にかなり集中しています。10大産地の中に慶尚北道の5産地が含まれており、この道は全国の生産量の56%を占めます(1999年度)。特に大きい産地は、同道内の清道、慶山、永川である。慶尚北道のほかには、その西側にある忠清北道にもも類の産地が多くあります。

#### (2) 栽培面積と生産量の推移

栽培面積は、1985年度と2000年度を比較すれば約5.6%の増加であって、りんごの減少、なしの増加と対照的に、大きな変化がなかったように見えます。しかし、面積

は、1980年代後期をピークに90年代後半まで減少していたが、その後回復したものです。この一時期の減少は、ウルグアイラウンド農業交渉を契機に国際競争力のない加工用ももの廃園が実施されたことによります。

生産量は、1985年度から89年度までは約13万tでほぼ同水準でしたが、翌年から減少し、5年間低い水準が続きました。しかし、その後は増加傾向が顕著となり、現在まで続いています。2000年度には生産量は17万tを上回りました(表5)。単収は、90年代までは約1t/10aと低迷していましたが、その後徐々に向上し、近年は約1.2t/10aとなっています。

#### (3) 品種別栽培状況

熟期別栽培面積は、りんご、なしのような偏りがなく、早・中・晩がおおむね均等な分布ですが、1992年度には晩生種が一番大きなシェアを占めていましたが、1997年度には中生種のシェアが一番となって41%を占めています(表6)。

品種別に見ると、りんごやなしの場合のように突出した品種はありませんが、倉方早生と有明が1985年度から1位、2位を争っており、3位は変わらず大久保となっております。

表5 もも類栽培面積及び生産量の推移

(単位: ha, t)

	1985年度	1990	1992	1994	1996	1998	2000
栽培面積	13,138	12,333	10,635	10,166	10,002	12,012	13,876
生産量	131,544	114,578	115,792	114,837	127,540	151,313	170,044

表6 1997年度におけるもも類主要品種の栽培面積

(単位: ha)

早生種計	2,927 (27.3%)	中生種計	4,444 (41.4%)	晩生種計	3,368 (31.3%)
倉方早生	1,456	大久保	934	有明	1,682
アームキング	538	天紅	769	白桃	859
砂子早生	252	美白	566	秀峰	213
月峰早生	168	鮮光	281	長湖院	156
白美	162	黄桃1号	277	レッドゴールド	109

(注) ( ) 内は栽培面積全体に占める比率

ります。しかしながら、新品種の栽培が伸びてきているので、これら3品種とも長期的にはシェアが低下しています。例えば、早生種ではアームキングが急増し、中生種では天紅、美白、鮮光等の品種が登場して品種の交替が生じてきています。晩生種においても、伝統的な品種であった有明及び白桃の面積は減少し、代わって長湖院やレッドゴールドが新品種として伸びてきました。

(4) 輸出状況

生鮮もも類の輸出量は極僅かで、2001年に88tに過ぎません。うち71.5tが日本向けでした。しかし、それを上回るもも類缶詰が輸出されており、過去3年間かなり増加傾向にあります。2001年の輸出量は213tで、うち169tが日本向けでした。

4 ぶどう

(1) 主要産地

ぶどうの主要産地は慶尚北道に集中しており、2000年度の生産量の43.1%を占めています。このほか忠清北道及び忠清南道にも大産地があり、大きな産地は韓国中央部にあるといえます。しかし、これまでの主要産地のシェアは低下傾向にあり、栽培が全国へと広がっています。

(2) 栽培面積と生産量の推移

2000年度の栽培面積は2万9千haで、1985年度と比較すると約80%増加しています。しかし継続的に増加したわけではなく、1986年度を頂点に一度は減少傾向に転じ、1991年度まで減少しました。翌年からは増加に転じ、1999年度にはついに3万haに

表7 ぶどう栽培面積及び生産量の推移

(単位: ha, t)

	1985年度	1990	1992	1994	1996	1998	2000
栽培面積	16,206	14,962	14,957	19,773	27,196	29,871	29,200
生産量	149,912	131,324	146,346	211,930	357,274	397,784	475,594

達しました。この一時期の減少は、ウルグアイラウンド農業交渉を踏まえ市場開放した際に加工用ぶどうが競争力を失うだろうとして、廃園政策がとられたためです。

生産量も栽培面積の変化と同様の推移を示しており、1993年度以降急速な成長を示しています。1999年度、2000年度の実産量は47万tを超えました。若令樹が多いことから、まだまだ伸びると予想されており、50万tが目前に迫っています（表7）。

単収も近年急速に上昇しており、2000年度の単収は1.6t/10aとなっています。

(3) 品種別栽培状況

早晩別には、圧倒的に早生種が多く栽培されていますが、1987年度から97年度の変化を見ると、早生種のシェアが13ポイントほど低下し、その分が晩生種の拡大につながっています。1997年度においては、早生種の栽培面積が全栽培面積の66.7%を占めています。早生種の中では、キャンベルアーリーがほとんどを占め、これはぶどう全体の66.3%を占めます。次いで多いのが中生種の巨峰であり、10年間に面積は10.6倍に

なりました。巨峰は中生種の面積の84%を占めます。3番目の品種は、急速に増えてきたセリタンで、これは晩生種全体の73.4%を占めるに至っています（表8）。

なお、1987年度から97年度の10年間に、キャンベルアーリーの栽培面積は72%増加、巨峰は同360%増加しています。また、晩生種の大半を占めるセリタンは、1987年度には栽培が極僅かであった品種です。

(4) 輸出状況

生鮮ぶどうの輸出量は、以前から極僅かでした。しかし、ブドウの実産量の増加に伴い、1998年から急に輸出量が増大し、99年、2000年にはそれぞれ155t、116tとなっています。

5 か き

(1) 主要産地

甘がきの最大の産地は慶尚南道で、ここには10大産地のうち7産地が含まれて、生産量は当道だけで全国の50%程度を占めます。そのほかには、慶尚北道、全羅南道にも大きな産地があります。しかし、10大産

表8 1997年度におけるぶどう主要品種の栽培面積

(単位：ha)

早生種計	15,153 (66.7%)	中生種計	3,993 (17.2%)	晩生種計	3,734 (16.1%)
キャンベルアーリー	15,419	巨 峰	3,359	セリタン	2,742
セネカ	22	ブラックオリンピア	129	マスカットベリーA	492
アルデン	8	シーベル	95	タノレッド	397
		デラウエア	79	アレクサンドリア	34
		ネオマスカット	64		

(注) ( ) 内は栽培面積全体に占める割合

地の栽培面積シェアは47%と低く、全国的に栽培されている果樹といえます。

一方、渋がきは、伝統的に慶尚北道に産地が多く、当道全体の栽培面積は全国の44%を占めます。特に栽培面積で全国1及び2位である当道の精道、尚州、それに5位の間慶を合わせた栽培面積シェアは42%であり、渋がきの生産は慶尚北道の一部地域に集中しているといえます。

(2) 栽培面積と生産量の推移

甘がきと渋がきを合わせた栽培面積は、近年増加傾向を見せています。この栽培面積の増加は、この時期に減少となったリンゴに替わって生じてきたものです。特に甘がきの面積が増加していると推定されます。最近年度のデータはありませんが、1997年度の栽培面積は2万9千haで、うち甘がきは79%を占めたと推定されます。

また、生産量も同様に増加しており、

1997年度には274千tとなっています。うち、慶尚南道、慶尚北道、全羅南道だけで全国の生産量の約88%を占めます。前述したように全国的に栽培はされているが、生産はこれら3道に集中しております(表9)。

(3) 品種別栽培面積

甘がきでは、晩生種が圧倒的に多く、1997年度では栽培面積全体の93.6%が晩生種です。次いで、早生種、中生種の順となっています。晩生種の中では富有が最も主要な品種で、晩生種の78%を占めていますが、近年、次郎の増加のためシェアはやや低下しております。早生種の中では、西村早生が急速に増加し、1997年度では早生種の中で87%を占めるに至っています(表10)。

また渋がきの品種は、1997年度には、多い順に甲州百目(1,657ha)、清道盤(1,553ha)、高種(441ha)となっています。なお、渋がきの用途は、約50%が干し柿、40

表9 かり栽培面積及び生産量の推移

(単位: ha, t)

	1994年度	1995	1996	1997	1999
栽培面積	22,440	25,099	27,201	28,812	—
生産量	—	194,584	—	239,570	273,846

(注) 甘がき、渋がきを合わせたもの。—はデータが不明。

表10 1997年度における甘がきの主要品種別栽培面積

(単位: ha)

早生種計	1,187 (5.2%)	中生種計	264 (1.2%)	晩生種計	21,184 (93.6%)
西村早生	1,035	松本早生	79	富有	18,554
早紅	65	一木系次郎	48	次郎	2,365
		禪寺丸	27	大安甘柿	119

(注) ( ) 内は栽培面積全体に占める比率



%が熟し柿ですが、慶尚北道の尚州等の主要産地では約9割が干し柿生産に向けられています。

#### (4) 輸出入状況

生鮮甘がきの輸出は、1997年以降急速に増加し、2000年には3千t、2001年には4千tに達しました。2001年の主要な輸出先は東アジアで、多い順にマレーシア、シン

ガポール、香港、タイとなっています。又、同年の輸出単価は、1,068米ドル/tでした。

また、ほとんどが日本向けである干し柿の輸出は停滞しており、近年の輸出量は30~50tです。輸出量以上に干し柿は輸入されており、2000年の輸入量は1,500tにもなっており、この大半が中国産です。

